

官民連携まちづくりフォーラム'23

11/6 (月)

14:30 ~ 17:30

@サンシャインシティ コンファレンスルーム

テーマ：『Well-being』の視点からエリアマネジメントを考えよう

本年度の「2023 年度 官民連携まちづくり DAYS 官民連携まちづくりフォーラム'23」では、近年話題となっている『都市の幸福度 (Well-being) 』に着目して、心理学や子育て環境を専門とする学識者からの基調講演、まちづくりの実践者であるエリアマネジメント団体からのインプットトーク、最後にパネルディスカッションを実施し、これからのエリアマネジメントの在り方を考えました。

1. 基調講演 (Well-being や子育て環境の考え方について)



前野 隆司氏 慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授

- ① 『Well-being』とは、1946 年に WHO の健康の定義で使われた言葉であり、身体的・精神的・社会的に良好な状態という意味である。
- ② 『Well-being』の計測方法は、笑顔計測や脳波計測といった最先端技術の活用が進んでいるが、アンケートで「幸せですか」「生活に満足していますか」と聞くのがポピュラーな方法である。
- ③ 幸福度の高い社員の創造性は3倍、生産性は31%、売上は37%高く、欠勤率が41%、離職率は59%低く、業務上の事故が70%少ないという研究結果が出ている。また、幸せな人は不幸せの人より、寿命が7年~10年ほど長いという研究結果も出ている。
- ④ エリアマネジメントを進めるにあたって、長続きする幸せ（非地位財）である、やりがいや働きがい、みんなが多様に助け合うつながりを作っていくことが重要だと考える。

三輪 律江氏 横浜市立大学大学院 都市社会文化研究科 教授

- ① 子どもの育ち、親の育ちには“群れ”と“まね”が欠かせない。生活の中に“群れ”と“まね”が減ってしまうと、子育て不安や育児不安に繋がってくる。群れて、まねるということを家族間だけでなく、地域間に戻していく必要がある。
- ② 「乳幼児生活圏 (300m 圏内)」には、場所だけあってもダメで、その場所につなげる仕組みや、子どもの主体性を意識する大人を増やすことが重要である。
- ③ 「子育て」は子どもを育てることが主となり、福祉サービスという印象が強くなってしまふ。子どもの育ちを主にする「子育て」を推進していく必要がある。
- ④ まちにある様々な資源を保育に活用し、まちでの出会いや関係性を広げていく手法論「まち保育」を推進することにより、子どもが Well-being になり、まち側も Well-being になると考えている。



2. インプットトーク (Well-being に繋がる具体的な取組について)



内川 亜紀氏 札幌駅前通まちづくり株式会社 取締役統括マネージャー

- ① **人体改造カブ株式会社**
札幌駅前通地区はオフィス地区であり、働いている方が3万人近くいるエリアである。ビジネスパーソンが働きやすく、地区全体が健康になる取組「人体改造カブ株式会社」を実施している。遊休地や地下歩行空間を活用して、防災意識向上の取組やアンガーマネジメントの研修、フレイルチェックなどを実施している。
- ② **まちのこそだて研究所 gurumi**
業種や時間帯、家族の形態が人それぞれ違う中で、どのように働きながら子育てしていくのかを「まちのこそだて研究所 gurumi」で研究している。保護者や子どもに関わる人のコミュニティづくり、遊びと学びの場として「ジェンダー」や「政治」などについての勉強会の実施、WEB や SNS で子育てについての情報発信を行っている。

石原 達也氏 一般社団法人北長瀬エリアマネジメント 代表

- ① **「あたらしいふつう」と親バカイベント**
子育て世帯や単身者の多い JR 北長瀬駅前エリアで、商業施設「BRANCH 岡山北長瀬」内の民間公民館『ハッシュタグ岡山』を拠点に、ダイバーシティや暮らし・人生について考えるイベントや単身者の孤食改善事業など「あたらしいふつう」として暮らしの再提案を行うとともに、「親バカイベント」と銘打って、子どもではなく親を主軸にした子育てイベントなども実施している。
- ② **北長瀬コミュニティフリッジ**
『コミュニティフリッジ』は、企業や個人により寄付された食料品や日用品を24時間365日いつでも取りに来ることができる、生活困窮者やシングルマザー世帯を対象とした取組である。現在、535世帯による利用登録、約1300名の個人の方、約140組織の企業に、年間約4800万円分の寄付がされている。また、グッドデザイン賞など様々な賞を受賞している。



3. 情報提供 (池袋エリアプラットフォームより)



倉林 真弓氏 池袋エリアプラットフォーム事務局

- ① 池袋には、古くからのお祭りや、アニメ・漫画・コスプレといった若者を中心に人気のサブカルチャーなど、多様な人を惹きつける文化が根付いている。また、まちづくりとしても、公園や歩道など公共空間を活用して様々な事業が進められてきた。
- ② 池袋の魅力をさらに高め、まちなかを回遊して、歩いて楽しい、会いに行きたくなる人がいるまちにしていきたいと考え、2022年11月に『池袋エリアプラットフォーム』を組成した。現在は、会員向けの勉強会やワークショップを実施しながら、「池袋未来ビジョン」の作成を進めている。

4. パネルディスカッション

Well-being とエリアマネジメントやまちづくりの関係性について

前野氏 エリアの人々がやりがいや生きがい、働きがいといったものを感じていると幸せに繋がることが様々な指標を作る中でわかった。また、Well-being 指標というものを作ったが、エリアマネジメント活動の効果を測るには実際に活動を行う狭いエリアで捉えることが必要。エリアレベルで調査を行うことは、どんな活動が Well-being の向上に関係しているかを可視化するいい単位になると思う。

石原氏 新しく引っ越してきて知り合いがいらない、子育てするのに孤独を感じているといった方々が、ハッシュタグ岡山をきっかけに新しいことを始めてくれている。それをきっかけに今までなかった繋がりが生まれ、その分だけみんなが豊かになっていく。この繋がりが広がりが Well-being に繋がると思っている。

子育て・子育てと Well-being やエリアマネジメントの接点について

石原氏 子どもがいることや子どもファーストで生活すること、まちと暮らしていくことが良いことであり、ポジティブに捉えられるものにしていくことが大事だ。

内川氏 緩い繋がりを作ることが大切。顔見知りであるだけで心理的安全性を確保できるし、継続して事業を続けていくことにも繋がると思う。また、様々な世代の人たちが一つの目標に向かって取り組むことを大切に、色々な関わりを作ることで、地域に活かせることも増えるし幸せも広がっていくと考える。

会場からの質問

まちづくりにおいてコミュニティが大切と言われるが、都市部では面倒に感じる人が多い傾向があるのも実情。そういったジレンマを乗り越えるために有用なことは？

- 様々な世代の人たちが一つの目標に向かって取り組むことを大切にしており、そういったきっかけを作ることが大事。(内川氏)
- 何かしたいと思った時に、すぐ関われる仕組みをどれだけ作れるか。出番が増えれば、やがて居場所ができていく。(石原氏)
- 目的のない場所を作ること。思わず利利的になってしまう仕組みや、やりがいを見つけられる場だけ作っておくのも一つ。(前野氏)
- ほとんど使われていない空間も使っていき、空間の存在を伝えていくことで人が集まる。これをたくさんの場所でやること。(三輪氏)

中高生や大学生とまちづくりの関係性についてお聞きしたい。

- 何かを一緒にやるという形を作り、役割自体も一緒に考えるなど主体性を持たせることが大事。(三輪氏)
- 中高生には探求学習といった地域に出て学習しようという取組がある。新しい教育の流れと、うまく絡めていくことが大事。(前野氏)
- 子どもが来なくなる場、またそれを大人が見守ることができる場が大切であると思うし、そういったエリアでありたい。(内川氏)
- 何かを無理やりさせなくても居場所となっているだけで愛着が生まれる。また、小さな経済を学ぶこともやりやすいのでは。(石原氏)

コーディネーター

小泉 秀樹氏

東京大学 都市工学科 教授

パネリスト：前野隆司、三輪律江、内川亜紀、石原達也



内川氏 新しい事業を考えるとき、その効果を測る指標や基準は自分たちで持ちにくいことが結構ある。Well-being 指標を用いて、自分たちの活動を振り返ることができるとすごく良い。

三輪氏 私が関わるエリアマネジメント拠点では、誰もがふらっと立ち寄り、そこにいて良いという設えがあり、子どもや子育て中の方がさりげなく集える工夫をしている。その中で役割を見出し、まちでの自分の居場所を増やしていくという一連の流れを大事にしている。施設等の中だけでなく、まちの中で自分の居場所をどれだけ増やすことができるかがまちづくりを行う上ですごく大事なことだと考えている。

前野氏 統計的には結婚している人や子どもが2~3人いる家庭の幸福度が高いという結果が出ている。昔に比べ、核家族や一人暮らしの数が増えているが、多世代の人が力を合わせて支え合えるようなシステムを今取り戻すことができるかが重要である。

三輪氏 ワーカーが多いエリアでは、隣の企業の人がパパとして同じ幼稚園だったというのがよくある話。緩い横の繋がりをや斜めの繋がりをワーカー同士で作っておくこと、そういった仕組みづくりは今の時代に合っているしできることだと思う。